

1 浜田公民館

事業名 つなぐ・繋がる家庭教育支援事業＜三世代交流事業＞

世代を超えて！わいわい交流教室

P 事業の目的

- 子育て世代が祖父母世代と季節の行事を通じて交流し、地域のつながりを強める。
- 異世代によるつどい、活動で関わる中でコミュニケーション力やふるまいの向上を図る。
- ◎地域の大人（祖父母世代、子育て世代）が一緒になって子どもの豊かな体験（人との関わりや伝統文化の行事体験など）を生み出し、活動することを通してその価値に気づく。

見込まれる成果・効果

- 地域の中で世代間の結びつきやあいさつ、見守り、ふるまいなどで世代間でつながろうとする機運を高められる。
- 子育て世代が地域活動に目を向け、積極的に参加することで若手の担い手が育つ。
- ◎住民の企画、運営への意識が高まり、住民主体による活動展開が期待できる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・子どもに体験させたい行事リサーチ
- ・相互の年間計画のすり合わせ・調整
- ・交流して「楽しかった」と思えるポイント作り
- ・おじいちゃん、おばあちゃんってすごい！と感じる場面作り(活躍の場)

動きづくり

- ・事業の実施
- ・ワークショップ等による振り返り（改善点や意欲の引き出し）
- ・出た意見をどうしたら実現できるか
さらなる協議や他団体・人材のコーディネート

まちづくり実践活動の姿

- ・子育て世代が中心となり地域巻き込み事業を展開する。
- ・地域のひと・もの・ことを活かす視点での交流活動を実施する。
- ・顔見知り増加＝安全安心（見守り）活性。
- ・子ども会、町内会、地区社協などとの横の繋がりで地域の結束を高める。

D 事業の概要

対象：子育てママクラブ・ブチ（子育て世代の親子サークル） ほのほの学級（高齢者サークル）
計画：ママクラブと公民館で「地域の方と関わりながら子どもに経験させたい事」を話し合う

★実施★

1回目 7月23日「そうめん流し」

ブチ：15家族（母親15人・父親8人・子ども28人）計51人

ほのほの：16人

子育て世代：祖父母世代が和むあそび

父親がスイカ割りで活躍

祖父母世代：浜田市民歌の合唱

そうめん流しのセッティング

公民館：レクリエーションの進行

事後に参加者アンケート実施



交流レクリエーションの様子



そうめん流しの様子

2回目 12月6日「おもちゃつき」

ブチ：22家族（母親22人・子ども25人）計47人

ほのほの：7人 地域の方4人

ワリエ・ヨソ協会 1人

子育て世代：お餅をつく

丸める作業、

祖父母世代：餅つき各場所での指導

公民館：餅つきの段取り



おもちゃつきの集合写真

3回目 1月10日「昔遊びと鏡開き」

ブチ：14家族（母親14人・子ども16人）計30人

ほのほの：4人 地域の方1人

ワリエ・ヨソ協会 2名

昔遊び指導 1名

全世代一緒に全体で昔遊びや童謡を楽しみ

一緒にぜんざいを食べる



ワリエ・ヨソ演奏で童謡を歌う

★今後の予定★ 4回目子育て世代企画「お楽しみ会」

C 成果・課題

- 地域の高齢者と顔見知りになることで、お互い声をかけやすい関係になり、町で出会っても会話ができたなど、地域のつながりが強まった。
- 核家族化で世代間交流が少ない家庭も交流が出来、季節の行事も楽しむことが出来た。
- 子どもを介して、関わる大人が交流の楽しさを実感し、元気をもらったり、充実感を味わったりしたことで、次回への参加意欲が向上した。
- ふり返りにて、子育て世代から祖父母世代に楽しんでもらう企画をしたいという声が出た。
- ▲企画や事業の実施に向けて、話し合ったり、準備したりしていくことの楽しさを感じる「しかけ」や、当日の交流が主ではなく、そこに至るまでのプロセスの中で世代間の交流が深まるような「しかけ」の不足。
- ▲子育て世代がお客さんにならないような工夫。

A 改善点

- 公民館主導の事業企画・運営ではなく計画段階から住民が参画して、一緒に作り上げ実施運営していく。
- 4回目の交流を子育て世代考案の企画で実施する。
- 子育て世代が地域で主体的な交流企画・運営をしようという機運を醸成するための活動（しかけ）を行う。
- 「地域ぐるみで子どもを育み子どもも大人も高まり合おう」という「はまだっ子共育プロジェクト」の理念を伝える機会を設け、活動を振り返りながらお互い意見を出し合って主体的な取り組みへの機運を高める。

2 石見公民館

事業名 協働のまちづくり事業

- ・地域の防災力パワーアップ事業
- ・いわみっ子まつり（防災コーナー）
- ・バスでめぐる地域の歴史探訪

P

事業の目的

- ・地域住民の交流や繋がりを深め、多世代の参加で防災の意識を高める。
- ・子どもたちの学びの場として、防災体験をする。
- ・防災講座を開催し、シニア世代の防災意識を高める。
- ・地区内の防災組織の立ち上げを支援する。
- ・防災に強いまちづくりを推進する。

見込まれる成果・効果

- ・自主防災組織を立ち上げようとする人材が増える。
- ・町内活動から、まちづくりに目を向けリーダーとなる人材が増える。
- ・若者からシニア世代まで一人ひとりの防災意識を高めることが出来る。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・公民館内に非常持ち出し袋の展示。
- ・防災講座を年1回開催。
- ・防災に関する体験の機会を設ける。
- ・事業を告知する回覧の仕組みづくり
- ・公民館まつりで防災コーナーを持つ

動きづくり

- ・非常袋の必要性を話し合う場づくり
- ・先進的に活動する町内会の話しを聞く講座や気象台出前講座の開催。
- ・公民館まつりで炊き出しや伝言ダイヤル水消火器備蓄食品の試食体験。
- ・エリアの町内会長と繋がり情報提供

まちづくり実践活動の姿

- ・非常持ち出し袋や備蓄品を準備する事で災害に備える意識を持つ。
- ・回覧等により防災講座を知り参加。
- ・災害の意識を強めることによりまちづくりに繋がる。

D

事業の概要

- **いわみっ子まつり** H28. 3. 27（日）体験者数 55 名（幼児と保護者、小学生等）
 - ・防災コーナーを設け、くどと釜で炊き出し、水消火器非常用食品の試食、伝言ダイヤルをスタンプラリー方式で体験
 - ・協力団体：安全安心推進課 3 名、防災士 3 名
 - ・次回 H29.3.26（日）いわみっ子まつりにてクロスロードの体験コーナー開催の予定

★ふるさと再発見事業 H28.6.19（日）一中2年生防災を兼ねた親睦会の開催を支援

参加者 150 名（生徒・保護者） 炊き出し、パケツリレー、防災の講演等

★町内会長、自治会長説明会 H28.7.12（火）石見公民館エリアの会長に呼びかけ

・公民館の役割と機能を説明。公民館だよりやチラシ等を回覧してもらうための仕組みづくり

- **第2回石見地区防災力パワーアップ講座** 参加者：33 名

H28. 11. 15（火）松江地方気象台出前講座 ～気象について学ぼう～

- ・まちづくり委員会（役員会）にて講座の案内
- ・講座の前に、非常食の試食（缶パン、即席梅がゆ、乾パン、アレルギーフリー食）
- ・これまで参加のなかった地域の 60 代 70 代の方が参加。

- **バスでめぐる地域の歴史探訪** 参加者 47 名 平成 28 年 11 月 19 日（土）

- ・シニア世代が参加。地域の歴史ある場所にバスでめぐる。
- ・ガイド役はその地域にお住まいの方に依頼。公民館の事業を理解し他の事業への参加を勧める



C

成果・課題

- ・先進的に町内の防災活動を行っていた方を講師に公民館で防災講座を開催。町内だけでなくまちづくりのリーダーとして、また学校支援事業では、小学 5 年生に講師として防災活動の体験的なお話をされ、活動の幅が広がった。
- ・日頃、防災活動に参加しにくい若い世代（中学生、幼児を持つ親世代）がそれぞれ体験活動をし、防災について関心を持つようになった。
- ・回覧から情報を得て、事業に参加した方が増えた。
- ・防災講座の参加者を増やしたい。

A

改善点

- ・防災組織の立ち上げについて市と連携しながら組織づくりの支援を行う。
- ・中学生と保護者を対象とした防災学習を今後継続して行えるように支援する。
- ・シニアの方の防災意識を高め参加しやすい日時について考慮する。

3 長浜公民館

事業名
ふるさと地域学習

郷土色

配信!

【 黄長石霞石玄武岩勉強会 ・ 郷土かるたの取組 】

P

事業の目的

- ・黄長石と霞石が共存する珍しい玄武岩は、国内では長浜・熱田・内田でのみ産出する事を知り、県の天然記念物に指定されている事の重要性について認識する。
- ・郷土かるたに取り組む事で、自分たちの地域の歴史を知り、さらに詳しく調べようとする意欲をもつ。
- ・生まれ育った郷土に、興味関心をもつ。(共通項目)

見込まれる成果・効果

- ・県の天然記念物に指定されている岩を知ってもらう機会が増え、多くの人を知る。
- ・かるたに読まれた以外の歴史にも関心をもって、調べようとする意欲をもつことにつながる。
- ・浜田市外の方にも知ってもらい、それ以外の魅力(石見神楽・四季折々の日本海)にも興味もち、長浜へ訪れるリピーターが増える。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・玄武岩コーナー(館内展示)の設置
- ・郷土かるた勉強会の開催
- ・かるたの配布や貸出
- ・かるたの紹介(文化祭等)

動きづくり

- ・玄武岩勉強会の実施
- ・玄武岩現地視察実施
- ・かるた大会の実施(子ども・大人)

まちづくり実践活動の姿

- ・他地方からの来訪者のための住民主体による環境づくり
- ・玄武岩を守る会等の活動
- ・住民によるイベントの開催

D

事業の概要

- ・マップ作り開始(公民館)⇒浜田商業生(生徒8名・先生2名)が自主的に勉強(浜田商業・公民館)

- ・講師先生と打ち合わせ(9月3日 公民館)

- ・黄長石霞石玄武岩 展示(9月20日 公民館)

- ・勉強会当日(10月8日 公民館・現地) 参加者21名

公民館で説明 現地視察(実際に黄長石霞石玄武岩に触れる 磁石を使い黄長石霞石玄武岩かどうか調査・観察 主な標柱と命名されている黄長石霞石玄武岩の場所の確認 ⇒帰館後の補足説明・質疑)

- ・郷土かるた勉強会(6月21日 地区住民対象) 参加者69名

- ・各団体・地域へのかるた配布・貸出

- ・郷土かるた 子ども大会(6月25日 長浜小学校児童対象) 参加者29名

- ・郷土かるた大会 八朔祭り会場(8月28日 ※当日豪雨屋外開催) 参加者12名

- ・地域かるた大会(1月14日 長浜公民館) 参加者 児童30名 大人11名



C

成果・課題

- ・現地で実際に見たり、手で触れたりすることで玄武岩を身近に感じ、改めて地域に対する関心が高まった。
- ・かるたの製作、取組を通して、長浜・熱田地区にはたくさんの魅力があることに気付いた。
- ・自分たちの地域の歴史を知り、もっと調べようとする意識が高まった。
- ・歴史をわかりやすく楽しく学べる郷土かるたの活用を幅広く周知する必要がある。

A

改善点

- ・今回は天然記念物の3ヶ所のみを観察だったが、他にも点在する場所の観察の方法を検討
～シリーズ学習等の立案
- ・市内外へのPR方法の拡大
- ・若い世代(20～50代)の参加を促せる事業を地域住民の意見を取り入れ立案

4 国府公民館

事業名 県課題解決型公民館支援事業

こくふ元気プロジェクト

P

事業の目的

- 地域課題に対する住民の意識を高める。
- ◎地域課題の中で住民一人一人が「できること」について考え・学び・実践できるようにする。
- ◎地域のそれぞれの団体や活動する人の繋がりを広げる。

見込まれる成果・効果

- ◎住民が自ら自分たちのまちのことを考え、自分たちの力で進めていこうと考える。
- ◎話し合いをとおして自分たちの「できること」を考え、同じ思いの人が集まり共有することで、活動を引っ張っていくリーダーが現れ「思い」を「行動」に進めることができる。
- ◎住民主体のイベント開催や地域資源を使ったレシピ開発や商品開発などに繋がる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・国府の地域資源への「想い」を出す場づくり
- ・住民の「思い」の見える化
- ・連続講座の開催

動きづくり

- ・行動する必要性を理解する講演会の実施
- ・住民主体の活動の進め方についての勉強会の実施
- ・プロジェクトの旗づくり
- ・「思い」から「行動」に向けての話し合いの場づくり

まちづくり実践活動の姿

- ・実行委員会によるイベント開催
- ・特産を活かした料理レシピの開発→イベントで発信→地元飲食店のメニュー→地域ブランド化
- ・イベントに向けての清掃活動の実施
- ・観光客の増加→商店の増加
- ・住民による地域活動の活発化

D

事業の概要

- 8月22日 講演「住民のチカラで 地域を元気に」、ワーク「地域資源の利用についての想い集め」
- 9月 7日 職員内で事業について研修、今後について協議
- 10月29日・30日 創作文化展 「想い」を掲示
- 11月11日 公民館運営推進委員と研修、ワーク
- 11月20日 講演「地域を元気にするヒント」、ワーク「国府の遊・食・美」
- 1月14日 住民活動の進め方についての勉強会
- 2月 2日 ワーク「国府の食」
- 1月 元気プロジェクトのぼりづくり会議
- 6月～3月 「国府学」「こくふ知っ得サロン」開催
- 通間 公民館だよりにて情報発信



集まった「想い」についてワークをしている様子



「国府学」で小学校児童を交えて学んでいる様子

C

成果・課題

- 住民が自分たちでできることを考えることができた。
- 自分たちの「想い」を実施するグループまたはサークルが作られ、活動に向け会議が重ねられ準備が進んでいる。
- 今までなかった地域住民、団体と繋がりが広がり、公民館へ集うようになった。
- 運営推進委員にも意識が高まっている。
- 公民館が地域課題について考える場となってきた。
- 公民館の発信した情報が住民同士の口コミで伝わるようになってきた。
- 連続講座実施によって公民館への関心が向上している。
- ▲多くの住民が巻き込める方法の検討が必要である。
- ▲事業に対する職員内での共通理解がもっと必要であり、そのための協議のあり方を見直す必要がある。
- ▲ゆとりをもった計画が必要である。

A

改善点

- ・職員会議等で協議を重ね、職員内での共有を深め、職員の意識向上。
- ・より多くの住民が活躍できる公民館事業の企画、運営。
- ・住民にわかりやすく伝わる広報のあり方。
- ・公民館来館者への積極的な呼びかけ。
- ・系統的で柔軟な年間の事業の立案。

5 周布公民館

事業名 「協働のまちづくり事業」

周布地区の史跡・名所及び避難場所が一目でわかるマップ(看板)を作ろう！

P

【事業の目的】

- ・マップ(看板)を作ることを通し、住民が自ら動き地域を大切にする心や防災意識を醸成する。
- ・地域の歴史上の人物の学習をし、周布地域にマップ(看板)を作る。
- ・町外の方だけでなく、地域の住民も周布の史跡等について周知する。

【見込まれる成果・効果】

- ・看板づくりや環境整備に取り組むことで住民が周布地区を大切に思う心が芽生える。
- ・地域の活性化に向け、みんなが協力していく活動が生まれる。
- ・住民の防災意識が高まり、自主組織の構築につながる。
- ・環境整備の改善につながる住民の動きづくりが期待できる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・地域の各団体への呼びかけ
(協力要請)
- ・検討会議の開催
(掲載写真、設置場所等)

動きづくり

- ・マップのレイアウト協議
- ・設置場所、地主への承諾
- ・設置作業(穴掘り・組立)
- ・リーフレットの作成

まちづくり実践活動の姿

- ・リーフレットを活用した各自治会での防災訓練
- ・マップを利用した史跡ウォーキングの実施

D

【事業の概要】

- 地域の各団体に協力要請の案内文を送付
11 団体(自治会・PTA・高齢者クラブほか)
- 検討会議(看板)
4 回開催(6 月・8 月・9 月)
- 看板設置作業(3 力所)
あなほり作業・組み立て作業・設置作業
- 各自治会に避難場所・年間事業を確認
自治会長あてに文章を送付
- 検討会議(リーフレット)
1 回開催(12 月)



検討会議中



穴掘り作業



組立・設置作業



設置完了 『除幕式』

C

【成果・課題】

- ・検討会議では積極的な意見がでて、事業に反映することができた。(異世代の意見が聞けた)
- ・地域全体のマップ作成で、各自治会でも町内のマップを作成するきっかけづくりとなった。
- ・もっと公民館と各団体との連携が必要である。
- ・若い世代を巻き込むことがやはり必要である。

A

【改善点】

- ・地域の声をもっと反映できる事業展開をしていきたい。
→住民主体の事業にむけて
- ・公民館と各団体との連携を密にしていきたい。
→共同事業の展開
- ・ワークショップの開催を増やす。
→地域の課題をみつける。

6 美川公民館

事業名 浜田市課題解決支援事業

広げよう！健康づくりで地域の和

P

事業の目的

- ・高齢化に伴う活動範囲、活動量の低下により、人との関わりが減少している。今の健康状態を維持し、少しでも改善できるような運動を実践し運動の大切さや参加者同士の仲間づくりの楽しさについて考える機会とする。誰もが一緒になって、自身の心と体の元気を目指す！

見込まれる成果・効果

- ・運動不足解消・気力の充実・人数不足解消・・他地域へも周知し、参加頂く事で、多くの方に美川を知って頂き、更なる活動への参加に繋げる。
- ・新しい力・住民主体を目指す・・参加者から自主的に活動したい方が現れる。きっかけは公民館だが、それぞれが個性を持った活動に取り組むことで美川カラーが生まれる➡まちづくり実践活動へ！

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・健康教室開設の為の下準備
(会議・打ち合わせ等)
- ・住民へ周知
(チラシ・公民館だよりにて案内)
- ・美川シニアサロンへも参加を促す。

動きづくり

- ・健康体操の開催
- ・他の活動との関連付け
美川シニアサロン
山里を活かす会の活動 等

まちづくり実践活動の姿

- ・住民が企画する健康対策事業が生まれる。
- ・参加者から自主的に活動したい方が現れ、自分達で教室を持って活動を展開する。

D

事業の概要

○健康教室の開催 ・9月～12月の月1回、日本3B体操協会公認指導士、健康運動指導士の先生方にお越し頂き、健康教室の開催

○美川シニアサロン(パソコン教室)総勢100名の方にも各曜日事《10教室》に月1回、健康体操を開催。頭(パソコン)も体(体操)も使い、健康維持に繋げる。



C

成果・課題

- 健康教室を通して出会う新たな人との繋がり、公民館事業に参加する方以外の参加者やリピーターを増やすことが出来た。
- ・町まで行き、健康教室へ通うには、交通の便、時間、費用等の面で非常に負担が大きいのが、公民館で行うことにより解消できた。
- ・講師先生の熱意と取り組まれた方の努力により、資格を取得された方が出られたのは大きな成果。公民館始動から住民主体の始動への移行が期待される。
- ・現在疾病のある方又は障害のある方の参加をどうするか参加できない方をいかに呼び込むかが課題である。

A

改善点

- ・平日開催のため保護者世代の参加が難しい。参加が見込めそうな美川幼稚園の保護者にチラシを配るなど近場から促し、ヤングママ、親子が一緒に出来る機会や世代間交流の場に繋げたい。
- ・女性の参加が多く、男性にも参加して頂けるような呼びかけ、企画の検討が必要。そのため、参加した方との話し合いの場を設定したい。
- ・会場を町内の集会所にすると本館まで来られない方の参加が期待できる。

7 大麻公民館

事業名 ふるさと地域学習事業

日本一海に近い

大麻公民館がお届けする

「海辺で遊ぼう！～いかだに乗ろう 磯辺の生物観察」

「納涼の夕べ ～キャンドルナイト」

P

事業の目的

- ・日本一海に近い公民館という条件を生かし、事業を組み合わせることで地域住民・他地区の方々と交流を深める。
- ・子供たちが自然の恵みや環境について知り、自然に対する思いやりや環境に対する意識を高める。
- ・夏の終わりのひと時を楽しみながら、地域が元気づくような場作りを行う。
- ・車窓から見る人たちに折居海岸をアピールする。

見込まれる成果・効果

- ・身近な海を通して子供たちと共に地域住民も触れ合いつながりが広がる。
- ・自然に対する思いやりや環境に対する意識も高まる。
- ・若者たちがふるさとに愛着を持ち、UターンやIターンにつながる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・海での遊びに何か工夫を。
- ・夕涼み時にゆっくり過ごせる場作り。
- ・海岸清掃。 ・広報活動。
- ・各団体・機関への協力と打合わせ。

動きづくり

- ・事業の組み合わせを検討する。
- ・地域住民への呼びかけ。
- ・磯辺の生物観察実施。
- ・いかだ乗り体験。
- ・キャンドルナイトの実施。

まちづくり実践活動の姿

- ・住民主体による環境美化活動の推進。
- ・一人ひとりの役割を明確にした実践活動の展開。

D

事業の概要

7月4日（月）

県水産技術センター職員との打ち合わせ

7月22日（金）

県水産技術センター職員と一緒に

「海辺の生物」下見

7月24日（日）

“海遊び”“磯辺の生物観察

いかだ乗り・スイカ割り

昼食…ぼべ貝のおむすび

事前協議会の開催

7月中旬～8月中旬

キャンドルの準備

8月20日（土）

ソーメン流し・くじ引きなど

“キャンドルナイト”



C

成果・課題

- ・打ち合わせを重ねたことで事業計画が分かりやすく協力も得られた。
- ・子供たちが興味を持ち積極的に活動ができた。
- ・地域住民の自然や環境美化に対する意識が高められた。
- ・海の幸の食文化の継承の必要性を感じた。
- ・天候に左右される事業のためそれに対応できる対応が必要。

A

改善点

- ・室内でも行える活動の考案。
- ・年間を通しての環境美化活動の実施。
- ・年配者や食改さんの協力での食文化についての学習会開催。

8 雲城公民館

事業名 県課題解決型支援事業

赤い妖精ハッチョウトンボを通じたE S D学習

P

事業の目的

- ・絶滅危惧種Ⅱ類のハッチョウトンボの観察・学習を通して、いかに限られた環境のもとで命を繋いできているか、人が生息域を狭めていると同時に人の助けがないと生存が危ういことを学ぶ。
- ・これを通して持続可能な環境を維持するには、人の考え方、環境への働きかけが大切であることに気づく。

見込まれる成果・効果

- ・命の尊さに気づき、ハッチョウトンボの小ささ、可愛さから「決して忘れられない身近な生き物」となることで、自らできる行動を考える。
- ・「棲息環境は放置すれば年毎に失われる」ことを学び、環境維持の大切さに気づくことで、自ら守る行動に繋がることに気づく。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・子供から大人まで働きかけ
る観察・学習会の計画
- ・高校自然科学部や専門先生
など魅力的な講師の招聘

動きづくり

- ・観察・学習会の実施による
環境教育の展開
- ・学校、公民館、他地域など
へのPR

まちづくり実践活動の姿

- ・棲息域の観察場整備
アクセス、草刈、歩道整備、
水管理、トイレ設置など
- ・棲息環境維持の取組

D

事業の概要

- ・公民館主催企画会義：小中学校、高校、まちづくり委員会、ハッチョウトンボを守る会、市役所環境課、生涯学習課、しまね自然と環境財団、ひろしま NPO センター
- ・公民館主催観察・学習会
浜田高校自然科学部生徒による指導
トンボ大国・杉村先生による現地指導
と講演「トンボの世界と地球環境」
他地域のトンボ生息地観察会
- ・棲息環境維持作業
まちづくり委員会、トンボを守る会、
一般ボランティア、小中高生など



観察会

C

成果・課題

- ・一般の生息地訪問者が毎日のように見られた。
- ・小学生から大人まで計画的な観察・学習会の実施により、ハッチョウトンボ及び共に棲息する絶滅危惧Ⅰ種モートンイトトンボに対する認識が深まった。
- ・ハッチョウトンボの歌、ハッチョウトンボのビーズグッズなどができ、今後一層関心が高まり、まちづくりに寄与されることが期待される。
- ・環境問題との結びつきを一層強める活動の推進が必要である。

A

改善点

- ・地域の宝として、まちづくりへの一層の活用を図る。
- ・公民館主催、まちづくり委員会共催という形で学習を進めてきたが、まちづくり委員会主催、公民館共催で実践的な守る活動を進めていくこと。
- ・モートンイトトンボの学習活動を進めるとともに、希少性を訴える。

9 今福公民館

事業名 浜田市課題解決支援事業

ふるさとの宝を知ろう 幻の広浜鉄道（今福線）ウォーキング

P

事業の目的

- 土木学会で土木遺産と認定されている「広浜鉄道ウォーキング」を実施しPRすることで、地域の宝であることを伝え、そこで次世代に伝えていくことをめざす。
- 事業を続けることにより、地域住民が遺構や歴史遺産に関心を示し、ふるさとに対する愛着と誇りをもつことをめざす。

見込まれる成果・効果

- 「地域の宝」を伝える事業として継続実施の足がかりとなる。
- 鉄道ファンなどが今福に集うようになる。→交流人口の増加。
- 今まで知らなかった今福近辺の歴史の勉強になる。→ふるさと学習。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- 地域住民と話し合う場を作り住民の意識調査を実行した。

動き作り

- 運営推進委員、他協力団体への呼びかけ
- 現地への下見
- ウォーキング大会の実施

まちづくり実践活動の姿

- 広浜鉄道や地域の歴史についての住民主体による学習会やイベントの開催。
- 自主的PR運動の展開。

D

事業の概要

- コースの下見（5/19）
- 公民館運営推進委員による現地踏査（6/13）
- 実行委員会立ち上げ現地整備（11/24）
- ウォーキングコースの最終整備と確認（12/26）
- 広浜鉄道（今福線）についての学習（2/17）
- ウォーキング当日に向けての役割担当の打ち合わせ（2/22）
- ウォーキング実施（2/28）（130名の参加）
- ウォーキング終了後（来年度に向けての振り返り）



実行委員会議



事前学習



現地整備



ウォーキング当日

C

成果・課題

- 企画、準備に地域の方が積極的に参加、協力があり、地域住民の新たな発見や生きがいにもなった。
- 地域住民の関心が高く、若者から高齢者まで参加が多かった。
- 地域外からの参加がたくさんあり手ごたえを感じた。
- 今まで知らなかった今福近辺の歴史の勉強になった。
- 地域の宝として次世代に伝えていけるよう持続性のある事業を目指す必要がある。

A

改善点

- 子供たちにも気軽に参加でき、楽しめるよう、行政や自治会、土木学会等と連携団体を拡大してコースの整備、維持活動を行う。
- ふるさと学習テーマの一つとし、学校と連携した活動を考える。
- 実行委員会の見直しや仕組みの確立によって持続性をめざす。

10 美又公民館

事業名 課題解決支援事業

高齢者が元気で暮らせるまちづくり

P

事業の目的

○高齢者を対象とした介護予防や健康寿命の延ばす体験交流活動を通して、高齢者がいきいきと安心して暮らせるまちづくりを目指す。

見込まれる成果・効果

- 右脳の活性化と前頭前野の刺激で介護予防に繋げる。
- 高齢者ドライバーが、日常生活に必要な身体的機能を知り、交通事故防止に繋げる。
- 最終的に地域行事やまちづくり等へ積極的に参加する高齢者が増える。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・高齢者サロンや公民館事業等で高齢者の意識調査・把握。
- ・臨床美術体験。
- ・元気でおたっしや運転塾開催

動きづくり

- ・高齢者の活躍できる公民館事業の実施。
- ・地区社協と連携し話し合いの場の設定。

まちづくり実践活動の姿

- ・高齢者自身が生きがいや、やりがいを持って活動に参加・参加する。
- ・上記のシステム作りを行う。

D

事業の概要

○臨床美術の開催

- ・H28年5月10日・・・こいのぼりを描こう。
- ・H28年7月12日・・・パイナップル造形。
- ・H28年11月1日・・・さつまいもを描こう。
- ・H29年2月7日（予定）・・・桜の屏風。



【臨床美術体験】
五感を使い創作体験をしながら
右脳を活性化される

【臨床美術】
出来上がった作品を、みんなで鑑賞し、感想を伝え合う



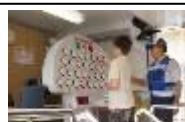
○元気でおたっしや運転塾の開催

- ・H28年7月5日 ワークショップの開催
『高齢者のことは高齢者同士で話し合い解決を目指す』
- ・H28年7月27日
『運転能力診断をしてみよう！』
『ご長寿交通安全号で身体機能チェックをしてみよう』

○関連活動として・・・高齢者の実態調査の実施



【元気でおたっしや運転塾】
「昔と今で自分の運転の変化」について話し合い、自分自身の運転を、客観的視点により再確認するワークショップを開催。



【元気でおたっしや運転塾】運転能力診断や身体機能チェックで身体的機能を知ることにより交通事故防止に繋げる。

C

成果・課題

- ・公民館活動に感心を持ち、公民館に集う人が増えた。
- ・事業を通し自分自身を知り、前向きな生活をしていこうという意欲に繋がった。
- ・参加者が固定化しているので、新たな参加者を事業に巻き込む仕掛け作りをする必要がある。

A

改善点

- ・高齢者の活躍の場を増やす。
- ・まちづくり、公民館、地域住民が互いに手を取り合う活動にしていくための仕組みづくりを行う。

11 久佐公民館

事業名 県地域課題解決型公民館支援事業

～若者を取り込み若者と取り組む地域づくり～ 『ふるさと遊楽校』

P

事業の目的

- ◎子供をもつ保護者同士の交流を図るとともに、その世代を地域活動に参画させることで、持続力のある地域づくりをめざす。
- ◎地域だからこそできる体験プログラムを作成することで、地域の魅力を再発見につなげる。
- ◎近隣の公民館とタイアップし、活動に参加することで、交流の機会を広げる。

見込まれる成果・効果

- ◎多世代が参画することで、将来に向けた持続性のある取組になる。
- ◎あらゆる世代の交流の場の提供を提供することで、参加者の拡充が見られ、将来的には、「参加者→担い手（参画者）」へ向かう。（土台作りの場）

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ◎若者と話し合う場所作り
- ◎活動に対する意識調査
- ◎活動事例の紹介

動きづくり

- ◎実行委員形式の会議を開催
- ◎スケジュールの作成
- ◎協力団体の呼びかけ

まちづくり実践活動の姿

- ◎イベントの開催
- ◎実践活動へのフォーラム
- ◎プログラムの確立

D

事業の概要

- | | |
|---|---|
| ○若者と公民館の話し合い（4/21）
（意識調査） | ○ふるさと遊楽校～第3弾～（7/31）
『とうもろこし収穫体験』へ参加 |
| ○第1回実行委員会開催（6/8）
（プログラム作成） | ○ふるさと遊楽校～第4弾～（8/20）
『案山子作り』 |
| ○第2回実行委員会開催（6/30）
（スケジュールの作成・内容の確認） | ○ふるさと遊楽校～第5弾～（11/6）
『さつまいもの販売』 |
| ○ふるさと遊楽校～第1弾～（7/16）
『ハッチョウトンボ観察会』へ参加 | ○ふるさと遊楽校～第6弾～（11/13）
『久佐探検～地域を歩いて知ろう～』 |
| ○ふるさと遊楽校～第2弾～（7/24）
『小国ふれあい交流会』へ参加 | ○第3回実行委員会（1/13）
『振り返り、次年度へむけて』 |



案山子作り



久佐探検

さつまいもの販売



振り返りの会では次年度へむけて、前向きな意見がたくさん出しました。

カレンダーの配布

C

成果・課題

- ◎新たな交流の場を提供し、人材の掘り起こしができた。
- ◎活動を通して、今まで知らなかった地域の魅力を発見できた。
- ◎振り返りの場を持つことで継続性のある事業となった。
- ◎地域外公民館と交流し、視野の拡大となった。
- △協力団体への呼びかけが必要である。
- △活動の期間が集中し負担が多かったので、事業内容と実施時期を見直す必要がある。

A

改善点

- ◎プログラムの内容を各集落に周知し、域内にある各団体へ参加協力を得る。
- ◎参加しやすい日程調整を図るために、各団体との連携会議を設定する。

12 波佐公民館

事業名 はまだっ子共育プロジェクト放課後支援事業

「子どもの城」

P 事業の目的

- 体験活動を通して、子どもの放課後を充実させる。
- 子どもと大人の地域への想いを高め、ふるさとに対する誇りと愛着を図る。

見込まれる成果・効果

- 「波佐っていいなあ」と思えるほど、地域における子どもたちの居場所が充実する。
- 子どもとかかわる地域の方が「喜び」や「やりがい」を感じながら、主体的に子どものために学ぼうとする。→地域のために動く大人の創出→地域の活性化へ。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・青少年健全育成アドバイザーからの立ち上げ
- ・学校・地域住民との会議
- ・研集会、学習会参加
- ・保護者、地域への呼びかけ

動きづくり

- ・公民館活動の見直しから連携
- ・子どもの城コーディネーターとの協議
- ・教室の開催
- ・講師との連絡調整
- ・保護者、地域への協力依頼

まちづくり実践活動の姿

- ・「波佐っていいなあ」という気持ちが子どもの心に育ち、将来的に地域づくり、人づくりへと繋がっていく。

D 事業の概要

H23年度より“子どもの居場所作り”からスタートし、H28年度より放課後子ども教室として開催

- ◇陶芸教室＝（6/11）
- ◇ハッチョウトンボ観察会に参加＝下米原吉留地区（7/16）
- ◇臨床美術＝ 石のアート（8/9）
- ◇陶芸教室＝公民館（9/16）
- ◇グラウンドゴルフをする＝波佐山村広場（10/15）**三世代交流事業**
- ◇食育教室＝（11/12）
- ◇小池先生と遊ぼう＝（12/10）昔の遊び
- ◇しめ縄作り交流会＝（12/22）**三世代交流事業**
- ◇ひなあられ作り＝公民館（3/11）

アートの力で育ちざかりの感性を刺激し、眠っている才能へ働きかけます。

食べ物を選ぶ力を養うバイキング調理体験



臨床美術



陶芸教室



食育教室

C 成果・課題

- 豊かな体験を通して地域の人と交流が出来た。
- 周知の方法を工夫したことで、保護者や地域住民の参加に繋がった。
- 振り返りにおいて子ども達の成長が見られ、子ども教室の必要性や地域スタッフのやりがいを感じられた。
- 波佐でしかこんな体験は出来ないの嬉しい」という保護者の感想が聞けた。
- 子ども達や地域住民の意見を取り入れ、内容も多様化する必要がある。
- 保護者世代の活動に対する賛同は見られるが、参加・参画がむずかしい。

A 改善点

- ・計画の段階から関係者を交え、事業計画を立てる。
- ・スタッフや、ボランティアを巻き込む方法を考える（保護者世代・大学生）

13 小国公民館

事業名 県課題解決型公民館支援事業

ふれあい交流会 『自然を満喫しよう！』

P

事業の目的

- ・人口減少、高齢化進行の地域で、地区を超えた親子との交流をすることで、地域住民が集う機会を提供する。
- ・自然豊かな小国を満喫することにより、小国への関心を高める。
- ・地域住民や参加者がテント張りや食事作り等の共同作業を行い、ふれあいを深めるとともに、地域住民のおもてなしの気持ちを高め、やりがいにつなげていく。

見込まれる成果・効果

- ・自然の豊かさを再認識し、小国を訪れるリピーターが増え、地域の活性化につながる。
- ・世代間、地域間交流を通じ、地域の活性化につながり、積極的な地域課題解決の機運が高まる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・職員、推進委員の思いを語る。
- ・話し合いの場をつくる。
- ・準備委員会を立上げ、推進委員会へ。
- ・10年続いた事業の振り返り。

動きづくり

- ・住民による環境美化作業。
- ・行政との協働(高齢者推進委員会)で事業拡大を図る。
- ・ふれあい交流会の企画立案・実施

まちづくり実践活動の姿

- ・若い世代の積極的参加・参画。
- ・役割分担を明確にした事業実施。
- ・ボランティアの充実。
- ・地域課題解決に向けた主体的動き。

D

事業の概要

- ・準備委員会、運営推進委員会 2 回、事業実施場所の環境美化作業(小国健生会)を行う。
- ・親子キャンプ【7月23日】
- ・小国川の生き物・ヤマメの生態観察(講師を招いて)【7月24日】
- ・川遊び(川下りの体験)【7月24日】
- ・夕食・朝食・昼食作り、室内レクをすることにより親睦を深める【7月23、24日】
- ・地区住民とグラウンドゴルフで交流【7月24日】



親子キャンプ



小国川の生物観察



川遊び

C

成果・課題

- ・豊かな自然を親子で体験し、小国の自然を満喫した。
- ・活動を通して、地域全体で子供を育むという意識づけに繋がった。
- ・子供の年齢層(幼児・小中学生)に応じた事業を企画する必要がある。
- ・参加保護者の事業への関わり方を考える必要がある。
- ・世代間・地域間交流を通じ、今後も継続して行うための糸口をつかむ必要がある。

A

改善点

- ・アンケートを参考に事業内容を検討し、廃止・継続・新規に実施するものを見極めるための協議の場を設定する。
- ・主催者、参加者、ボランティアスタッフそれぞれの当事者意識を高め、一緒に楽しむという雰囲気(意識)作りを行う。
- ・できるだけ多くの住民を巻き込み、参加・参画するための仕組みをつくる。

14 今市公民館

事業名 平成 28 年度地域課題解決

おたがいさまのチカラで創る旭っ子フェスティバル R 版
～ 一人ひとりのできることを結集！ ～

P

事業の目的

- ◎ 子どもの持つ周りを明るくする笑顔や歓声の下、地域住民が楽しみながら集える場を創り、地域住民の集まりが多様なコトを推す原動力となるようにする。

見込まれる成果・効果

- ◎ 誘い合う、協力をし合う、役割を分かち合う等の「お互いさま」のチカラが育まれ、世代を超えた交流の深まりが生まれ、生活面や防災面での不安軽減が図られる。
- ◎ 将来にわたり、育った地を大切に愛おしく想い、当事者として関わる事の楽しさを体得する子どもの育ちが期待できる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・ 従来からの事業の見直し
- ・ 地域の様々な協力団体や保護者との意識合わせ
- ・ 中学校（部活動）との調整

動きづくり

- ・ 実行委員会委員の募集
- ・ 今市自治会事業との協働
- ・ ワーキンググループ編成による事業実施

まちづくり実践活動の姿

- ・ 住民自身や関係者が思い描く事業内容（企画）を補完するまちづくり部会による事業実践活動

D

事業の概要 ◎当日協力ボランティア 70 人（内中高生 14 人）、参加者 274 人（内自主防 34 人）

○旭中 A L T さんによる外国の手遊びゲーム（はじめの会）

○お菓子ポイント宅、スタンプラリー宅訪問 協力世帯 19 戸

○ハロウィンエリア内の休憩ポイント 2 か所と撮影ポイント 1 か所

○今市自主防災会との共催「大炊き訓練」による地元米の試食会

2016・
10・29

開催！



休憩ポイント（集会所）



お菓子ポイント探し



撮影ポイント



お菓子ポイント探し

C

成果・課題

- ・ 数回の実行委員会開催を通じ関係者同士の親睦に加え、当事者意識の醸成が図られた。
- ・ 関わった多くに「これくらいなら協力できる」という思いから一体感が生まれたことで、子どもを楽しませる事業から子どもと共に楽しむ事業にシフト替えのきっかけを得た。
- ・ 参加者として参加しなくなった中高生とその保護者やエリア以外の住民を外野にしない工夫が必要である。（参画者としての位置付け）

A

改善点

- ・ 中高生をお手伝い役から、企画書などを募集し自主参画に移行していき、子ども自らの成長の場にしたい。
- ・ 事業のメインであるお菓子に「今市ならではの」の味も取り入れ、参加する若い世代に味の伝承の場となる内容にしたい。



15 木田公民館

事業名 ふるさと再発見事業

『親子で取り組む梨づくり体験学習』（今市公民館との共催事業）

P

事業の目的

- ・「梨生育体験学習〔受粉→摘果→収穫〕（4年生授業）」の地域版学習会を企画し、中学生や保護者の参加を促すことで、自ら学習し、理解を深めようとする機会をつくる。
 - ・学習を通して、旭のよさを再発見し、旭に暮らす誇りをもてるようにする。
 - ・「赤梨」に込める生産者の想いにふれ、中学生の視点で職業や将来の夢、未来の旭を考えるきっかけとする。
- 見込まれる成果・効果
- ・学習を通して、中学生としての職業観やふるさと観が芽生え、将来に対する夢や希望がもてる。→次世代を担う人材の育成につながる。
 - ・おとなにとっては、この学習をきっかけに、地域の発展について考え、協議するようになる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・ふるさとの良さを再発見する。
- ・意識調査を兼ねた申込書を配布。
- ・ふるさとの自慢について体験を通して改めて感じてほしいという思いの確認。

動きづくり

- ・学習会の実施
- ・地域の生産者に協力してもらい、旭の産業を体験する。
- ・収穫後は福祉施設へ贈り、地域の人々の温かさに触れる。

まちづくり実践活動の姿

- ・学んだ大人が地域の活動により積極的に参画する。
- ・住んでよかった、住みたくなるふるさとにするための活動を展開する。
- ・ふるさとを考える意識の高揚を図るための学習会を実施する。

D

事業の概要

H28/5月【チラシ配布】

どのくらいの参加者があるのかを事前に把握できるよう、申込書を出してもらう。

H28/5/15【摘果・袋掛け作業】

28名が参加。小学校の時お世話になった生産者が、当時と同じ資料を使って説明をされた。摘果の後に残した果実に傷がつかないように、見た目もきれいに育つように小さな紙袋を掛ける作業をした。

H28/7月【袋の用意】

自分の梨の目印となるよう、事前に梨に付ける紙袋に名前やイラストを描く。

H28/7/24【袋の掛け替え作業】

前回袋を掛けたが果実が大きくなったので目印を描いた大きい袋に掛け替える。

H28/10/16【収穫】

自分の名前が書かれた梨はどんなふうに成長したか楽しみに、ひとつひとつ丁寧に収穫した。採れた梨をその場で試食し、振り返りアンケートを書いた。アンケート結果より82%の生徒がまたこのような体験をしたいと回答、100%の生徒が旭の梨がとても好きだと回答した。

H28/10/18【お裾分け】

収穫した梨を地域に貢献すること、地域の方にふれあう意味で今回作業した中学生2人が代表でお裾分けをするために地元の介護福祉施設を訪れた。施設長をはじめ、施設のスタッフの方々へどのような作業をしてこの梨が育ったかを説明し贈呈した。

5月15日摘果・袋掛け作業
梨の生育について生産者に学ぶ



7月24日袋掛け替え作業



袋に名前を書く



10月16日収穫



収穫の時目印に

10月18日お裾分け



C

成果・課題

- ・ふだん美味しく食べている特産の梨について、生産者の大変さや喜びを体験した事により想いを身近で感じることができた。
- ・昨今親子での活動が減りつつあるが、この活動を通し親子で汗を流し、梨の生育を楽しみ、子どもの成長も見ることができた。
- ・それぞれが自分のふるさとを見つめ直し、郷土を愛する心を育てたい。
- ・天候や生育状況、中学生の都合、生産者の都合と日程調整が困難を極めるため、早くから日程の調整を図る必要がある。

A

改善点

- 親子で参加した家庭が多かったので保護者にもアンケートを求め、意識を把握する。
- ・地域ボランティアも増やし、中学生との関わりをもつことの機会を増やす。
- ・調整を図るために組織体制を整える。
実行委員会の開催
公民館によるコーディネート

16 和田公民館

事業名 ふるさと再発見事業

和田地区マップを作ろう！

P

・事業の目的

- 中学生が地域を見直していいところを発見することで、ふるさとへの愛着心をもつようにする
- 「和田地区健康なまちづくり計画書」にある計画の一端を中学生が担うことで、地域の一員であるという気持ちを持って貰う。
- マップを作ることで和田地区の「ひと・もの・こと」を後世に伝える。

・見込まれる成果・効果

- ①作成したものや調査したものをまちづくり活動の資料として使うことができる。
- ②マップを作り、視覚化することで地域への関心が強くなる。
- ③地域外から来た人にも和田地区をよく知って貰うことができる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・中学生と保護者への取組の説明会
- ・公民館運営委員会での課題解決についての話し合い

動きづくり

- ・健康スポーツ部会との協議
- ・県大ボランティアの参画
- ・マップ作りチームの立上げ
- ・中学生とのマップ作り学習

まちづくり実践活動の姿

- ・いいところランキングの調査
- ・マップ作りの実施
- ・新コースでのウォーキング開催

D

事業の概要

- 県大生ボランティアとの事業内容の協議
- 中学生と保護者に地区内のいい「もの・ひと・こと」のリストを作成
- 中学生バージョン「和田自慢マップ」・「いいところランキング」の作成 7月25～27日
- パソコンでのマップの作り方学習会の開催
- 地域へのいいところランキング調査の実施
- 「和田地区マップ作りプロジェクトチーム」の立ち上げ
- 一般バージョン和田地区マップ作り 10月～
- 健康スポーツ部会と新ウォーキングコース策定
- 健康ウォーキング開催 11月6日



マップの作り方学習会の様子



マップづくりの様子

C

成果・課題

- ・中学生同士で知らなかったことを教え合っている状況が見られた。→**ふるさと再発見**
- ・いいところランキングに出たものの中から新ウォーキングコースを策定することができた。→①
- ・マップを作るために資料を見たり話をしたりすることで、地域に関心を持つようになった。→①②
- ・出来上がったマップやランキング結果を今後どのように活用するか協議の場づくりが必要である。→①②③

A

改善点

- ・新ウォーキングコースの策定
→マップにある場所をより詳しく多くの人に知ってもらうために現地説明会の開催や説明の出来る人を増やす学びの機会の企画。
- ・PR活動をする
→地域外の人にももっと和田地区を知ってもらうための協議の設定。

17 都川公民館

事業名 ふるさと再発見事業

棚田トレッキング

P

事業の目的

- 地域の歴史遺産ともいえる「都川の棚田」をめぐすることで、健康づくり機会とする。
- 歴史遺産に出会うことで、愛郷の心を合わせ醸成する。

見込まれる成果・効果

- ・中学生を含む住民の健康づくりの一助ができる。
- ・中学生を含む住民が、郷土の魅力を再発見し、郷土愛が高まる。
- ・都川の魅力を地区外にPRできる。



入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・「棚田をPRしたい」地域の願いを知り、広める。
- ・トレッキングコースの設定
- ・開催案内を配布し参加者募集

動きづくり

- ・棚田所有者等への協力依頼
- ・マップ、図鑑等の作成
- ・住民によるコースの整備
- ・トレッキングの実施

まちづくり実践活動の姿

- ・健康の維持増進ができる。
- ・都川の魅力を地区外の人に知らせようとする住民主体の動きができる。

D

事業の概要

- ・コースの設定とパンフレット作成
コースのポイント説明を掲載したマップとコースで見ることのできる野花、山菜、樹木図鑑を作成し参加者に配布した。
- ・コースの整備と会場準備
棚田所有者とコースの草刈りや案内板、展示物（神楽衣装、花田植の牛）の設置を行った。
- ・トレッキングの実施（H28.5.29）
- ・H28.5.27 に開催予定、H28.5.31 に実施結果が山陰中央新報に掲載された。



C

成果・課題

- ・伝統的景観の魅力を間近で感じ、先人による石積み努力に感嘆できた。
- ・都川の魅力を幅広い方々に伝える機会となった。
- ・そこで作出される棚田米の収穫や味覚にも関心が広がり、食への感謝の心が醸成できた。
- ・棚田所有者も多くの方々に見てもらい、維持管理への大きな励みになった。

A

改善点

- ・地区外の方々へのPRを工夫し、より広域からの参加をつくる。
- ・次代を担う小・中学生の参加を増やすため、子供会の協力を得る。
- ・作出される棚田米のPRも併せて行う。

18 市木公民館

事業名 ふるさと再発見事業

石見神楽面・長浜人形絵付け教室

P

事業の目的

小学校閉校、進学、就職と、ふるさと市木を離れても「市木の子」であってほしい。現在の神楽面の発祥地は市木「市木面」にあるところから、郷土の文化を学ぶことで、ふるさとへの誇りと愛着を持たせる。また、技法は違うが、どこの家庭にもあった長浜人形の絵付けを体験させ、地域の伝統文化に興味を持たせる。

見込まれる成果・効果

「物」として残る、神楽面、長浜人形を通じ、「ふるさと市木」を振り返ることへの期待。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり
閉校をうけ、学校、公民館運営推進会とインパクトのある「こども対象事業」について検討。

動きづくり
学校、PTA、地域協力団体、講師との協議検討。ふるさとへの愛着を持たせることで、こどもの動きが出来る。

まちづくり実践活動の姿
こどもを支える大人が地域作りを担う。

D

事業の概要

- 通学合宿 H25.11
H26.3 浜田市立市木小学校閉校
- 研修合宿 H26.11
- 校歌の山へ登ろう H27.8
天狗石山 1191,8M
- 研修合宿 H27.11
神楽面絵付け教室 講師 安東三郎先生
島根県伝統技能工芸士
- 長浜人形絵付け教室 H28.8
講師 安東三郎先生
- ふるさとカレンダー H28.12
市木の好きな風景、行事等のスケッチで作成



通学合宿



校歌の山へ登ろう



神楽面絵付け教室



長浜人形絵付け教室

C

成果・課題

- ・一連の学習を通じ、ふるさとに対する思いを醸成できた。
- ・神楽面、長浜人形を一生の宝物として持っている。
- ・市木の子として、各合宿を通じ「小さな村根性」(小さな単位での仲間意識)づくりとなっていれば嬉しい。

A

改善点

- ・児童皆無となり、本年度をもって「こどもふるさと郷育」は終了。中高生の要望には門戸を開いておく。
- ・今後は視点を高齢者に絞り、安全安心の各種事業について地域団体と協議中。

19 杵束公民館

事業名 三世代交流事業

夏休み子ども体験教室！ みんなで川へ行こう！！

P

事業の目的

- ・地域の高齢者から昔の生活の知恵や遊びを教わったり、川遊び等の自然体験をしたりすることを通して、子どもや保護者と地域の繋がりを強める。
- ・高齢者の活性化に繋がることをめざす。

見込まれる成果・効果

- ・異世代交流(地域交流)をすることで、地域住民が互いに顔見知りになり、地域の活性化につながる。
- ・コミュニケーション能力や社会性が養われる。
- ・自然体験を通して様々な知識を身につけ、危険を回避する能力等を高めることができる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・子どもと交流する機会が少ない地域高齢者との橋渡し。
- ・昔の知恵を後世へ繋いでいきたい思いを知り、話し合いの場の設定。
- ・小学校へ川遊び事業の説明。

動きづくり

- ・川遊びに適している場所の探索(5・6月)
- ・企画会議の実施
- ・小学校へ川遊び事業の案内
- ・事業の実施と振り返りの会の設定

まちづくり実践活動の姿

- ・住民による川周辺の環境整備
- ・住民による積極的な参画・参加
- ・住民による子ども活動のシリーズ化
→放課後の居場所活動の実施

D

事業の概要

7月26日(火) 川遊びを実施

参加者：弥栄小学校児童 29名

スタッフ：21名(地元集落の方・高齢者クラブ
児童クラブ・社協・
安城・杵束公民館職員)



大人が安全に配慮しながら、子ども達は川遊びを楽しんだ。また高齢者クラブの方に火おこしの方法、飯盒炊飯でのご飯の炊き方、カレー作り等も指導してもらいながら、昼食を作った。



高齢者クラブの方に教わりながらのカレー作り！



C

成果・課題

- ・地域の高齢者と子ども達が交流し、高齢者から昔ながらの暮らしの知恵などを学ぶ姿が見られた。
- ・教え伝えていく学び合いが子ども達にも、高齢者にも貴重であり、地域で子どもを育てる意識が高まった。
- ・高齢者クラブ等、ボランティアスタッフの高齢化が進み、若年層ボランティア(高校生・大学生・保護者世代等)の育成が必要である。

A

改善点

- ・新規メンバーの開拓。特に若い世代を取り込めるような事業の見直しをする。
- ・自然体験プログラムの充実。

20 安城公民館

事業名 市課題解決支援事業

地域で支える高齢者活き活き事業

P

事業の目的

○高齢者が、異世代交流や軽スポーツ活動を通して、地域で元気に過ごし、生きがいをもって生活できるような環境を醸成する。

- ・高齢者が家に閉じこもらない、地域で活躍できる場づくり
- ・高齢者が多世代と交流する仕組みづくり

見込まれる成果・効果

- ・高齢者が、公民館活動や地域行事に自主的に参加するようになる。
- ・高齢者が、地域住民と積極的にかかわることで、関係性が高くなり、地域ぐるみで支えようとする雰囲気生まれる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・公民館へ出かけることで、家に閉じこもらない場づくり
- ・健康を意識する場づくり
- ・地域の各団体への協力依頼
- ・内容の協議と事業周知

動きづくり

- ・サロンの内容を一緒に考える座談会の開催
- ・参加者の意見をもとにした活動の立案・運営

まちづくり実践活動の姿

- ・各集落の高齢者サロンでリーダーとなって活躍するようになる。
- ・高齢者を支える地域づくりへの住民の機運醸成

D

事業の概要

1回目 6月27日(月)
 ≪内容≫ 笑おう話そう
 健康チェック
 体操、脳トレ
 座談会
 参加人数 21名



2回目 8月22日(月)
 ≪内容≫ 子ども達と一緒に
 健康チェック
 電子紙芝居
 弥栄にこにこ体操
 参加人数
 26名+小学生28名



3回目 10月25日(火)
 ≪内容≫ バスに乗ってお出かけ
 浜田市世界こども美術館
 県立大学の学食でランチ
 浜田警察署、中央図書館
 参加人数 23名



4回目 12月26日(月) ・ 5回目 2月27日(月) 開催予

C

成果・課題

- ・1回目の参加者が誘い合って、次の回には新しい参加者が増え、交流が深まった。
- ・継続しての参加者が半数(3回皆勤者10名)
- ・お出かけ先など参加者が積極的に意見を出す等主体的な動きが見られた。
- ・男性の参加者が少ない。呼びかけの方法を検討する必要がある。
 (1回目2名、2回目0名、3回目1名)

A

改善点

- ・男性の参加者を増やす。
 ～まずは公民館によく来られる方から声掛けをする
- ・内容がマンネリにならない工夫。
 ～次年度以降も継続できるよう、参加者に積極的に意見を出してもらう機会を増やす

21 三隅公民館

事業名 ふるさと地域学習事業

三隅城のろしりレー・三隅氏学習会

P

事業の目的

- 地域の歴史を知ることにより、ふるさとを愛する心を育む。(体験活動と学習の両面から)
- のろしりレーを行うことによって、セミナーで訪れた出城に継続的に登るきっかけを作る。
- 地域学を通じた地域間の連携を図り、三隅町全体の活性化に繋げる。

見込まれる成果・効果

- 子ども達を中心にプロジェクトの輪が広がり地域全体で子どもを育む機運が向上する。
- 中学生の姿が地域の中に見え地域が元気になる。
- 地域を越えた事業の発展。→交流人口の増加。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・健康づくりのためのウォークの企画(出城等)
- ・三隅城および出城の整備
- ・三隅学の学習会の開催
- ・SNS等で外部へ事業発信

動きづくり

- ・三隅氏を軸としたセミナーの開催
- ・三隅城と出城を結ぶのろしりレーの開催
- ・交流会を通し地区を越えた繋がりを構築する

まちづくり実践活動の姿

- ・セミナー講師の育成
- ・三隅氏歴史副読本の制作
- ・自主的組織による三隅氏学習会の開催
- ◎町全体のイベントとの連携

D

事業の概要

- 三隅氏学習会(29年1月27日)
三隅中1年生社会科(中世の時代)
- 高城整備(28年7月10日)
草刈等
- 見ぬ友と心結ぶのろしりレー参加
(28年7月16日)
参加団体(全国114団体)
- 各出城整備(28年10月23日)
草刈等
- 三隅城のろしりレー
三隅町内9ヶ所(28年10月30日)
- 交流会&反省会(29年1月28日)
石田城担当(海石集会所)



C

成果・課題

- ・1年生の社会科で三隅氏の学習会をし、三隅城のろしりレーに参加することによって学びのフィールドワークができ、ふるさとにより愛着を持つことができた。
- ・中学生との活動を楽しむために、昼食やおやつを準備する地域が増え、大人たちが元気になった。
- ・地域間の交流により自主的な三隅氏学習会が開催された。
- ・SNSで活動を発信することによって全国ののろしりレー団体と繋がりを持つことができた。
(広島発 見ぬ友と心結ぶのろしりレーに参加)

A

改善点

- ・中学生の参加(特に1年生)を増やすために三隅氏学習会の時期等を検討する。
- ・のろしりレーの参加者の高齢化により若い世代を取込むための事業を考える。
- ・6地区の繋がりをもっと強くして全体のネットワークを構築するための仕組みをつくる。
- ・のろしりレーの時期の検討。
例えば、三隅つつじ祭り、三隅フェスティバル等と連携し、多くの人にアピールする企画を検討する。

22 三保公民館

事業名 ふるさと地域学習事業

人々の優しさを育んだまち三保

P

事業の目的

- 住んでいると気づきにくい「三保のよさ」を新たに発見、再認識できるようにする。
- ◎三保地域の活性化や地域づくりの関心を高める。
- ◎住みやすい三保地域を守るために、地域住民が「地域への思い」を考えていけるようにする。

見込まれる成果・効果

- 三保の「よさ」を再認識することで、地域に関心をもち、特性を生かした活動が展開できる。
- ◎地域住民のリーダー的存在の掘り起こしと、今後の発展につなげる人材育成ができる。
- ◎まちづくり推進委員会を中心に、三保地域全体の事業の取り組みや学習会が積極的に開催される。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- *資料をもとに昔の三保地域の調査。
- *DVD作成のための資料収集。
- *三保へ馴染みのある人への声かけ
- *三保の「よさ」を再認識する場作り
- *講演会に向けた打ち合わせ会。

動きづくり

- *DVD作成。
- *講演会や発表会など地域住民参画の学習会実施。
- *参加者からの感想聞き取り。

まちづくり実践活動の姿

- *地域のリーダー的人材の掘り起こしがすすむ。
- *まちづくり推進委員会・生涯学習推進委員会・自治会連合会の連携・活動が活発になり「三保のよさ」をアピールする活動が行われる。

D

事業の概要

- リーダー的人材の把握と打合せ会
(「三保の歴史」「教育と文化」「商工業」)
- 新聞記事や資料の収集
- 第1回学習会開催
H28. 8. 27(土) 約120名参加
・講演「三保の秘話」
・昭和の歌姫「美空ひばり」ショー

○第2回学習会開催

- H28. 9. 3(土) 約80名参加
- ・DVD鑑賞「懐かしき三保」
- ・講話「人情豊かな三保の人々」「紙すき職人のつぶやき」
- ・平成の歌姫コーラス「つくし会」



第1回学習会



第2回学習会



C

成果・課題

- *これまで忘れていた三保独特の文化・地域性などを再発見することができ、住民の地域に対する愛情が深まった。
- *温かく心優しく包容力のある人が多い三保のすばらしさを感じ、住みよい地域だと気づくことができた。
- *昭和51年の新聞記事にあった三保地域住民のよさ「さっぱりとした人情豊かな三保の人々」の特性を生かしながら、地域の活性化につながる事業を展開していくことが今後必要である。

A

改善点

- *「三保のよさ」をアピールするために、各自治会で開催しているサロン事業の発表の場作りや、より一層の発展性を求めながら、リーダー的人材の発掘に努める。
- *三保地域の自然環境(海・川)を利用した事業を掘り起こし、地区内外の人とのつながりを深め、若者の参加を促し、地域の活性化につなげる。
(手作りイカダレース・魚釣り体験競技等)



岡見うちわ祭り

～涼を呼ぶ団扇 地域の内輪の集い～

P

◎事業の目的

住民が協力して祭りを開催し、多くの人が集うことで、楽しみながら地域のつながりを強めると共にふるさとへの関心を高めることを目指す。

◎見込まれる成果・効果

世代を超えて
同じ目的を持ち一緒に
活動する場に！

幅広い年齢層の
多くの人が集い、楽しめる
場に！

学校も巻き込むことで
地域と学校が助け合える
関係に！

・顔見知りが増え、住民どうしのつながりが広がる。
・子どもや若者がふるさとへの関心を持つきっかけになる。

・地域のつながりが強くなる。
・次世代のリーダーを育てる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・地域の人が集い、楽しめる場があればいい。→公民館の夏の事業として始まる。
- ・生涯学習推進セミナーとして取り組む。

動きづくり

- ・地域の各団体、学校などに協力を呼びかけ、出店、ボランティアを募る。
- ・スタッフTシャツを制作し連帯感を高める。

まちづくり実践活動の姿

- ・小中学生を含めた多くの住民の協力による開催。
- ・岡見の行事として定着。祭りに合わせて帰省する人もある。

D

◎事業の概要

【事前準備】

- ・企画会議 2回実施
- ・担当ごとの打合せ 随時
- ・地域各団体、住民へ協力依頼
- ・Tシャツ、うちわ制作
中学生にデザイン募集
- ・環境保全ため「リユース食器」の使用を検討→使用決定
- ・広報 ポスター、チラシ等
- ・会場整備 駐車場草刈り、テント他の物品借用など



会場の様子



Tシャツ姿のスタッフ

【当日（7月31日）】

- ・早朝より会場準備（小学生も参加）
- ・午後5時スタート
- ・来場者 約600人
- ・内容 屋台、ゲームコーナー、舞台パフォーマンス、こけっこー長鳴き大会（来場者参加） など
- ・午後9時 終了
※来場者も参加してテント、イスなどの片付けを行う。

【翌日】 会場清掃、物品返却等

【後日】 振り返り会議

C

◎成果

- ・スタッフにも来場者にも若い世代が目立ち、祭りを通じて地域行事への参加、協力のきっかけづくりに役立った。
- ・「リユース食器」導入で地域の環境保全を考えるきっかけづくりになった。

◎課題

- ・高校生、大学生などのボランティアがいない。
- ・夜間開催ということもあり、高齢者や遠隔地の住民（自動車等の移動手段のない方）が参加しにくいとの声もある。

A

◎改善点

- ・ボランティア募集方法の改善—高校生、地元専門学校生などにも積極的に呼びかける。また、個人的なつながりを活用する。（スタッフの子供さんなど）
- ・祭り時における送迎バス等の運行を検討する。

24 井野公民館

事業名 協働のまちづくり事業

井野端会議「ふるさと夏まつり」



P 事業の目的

- 若手（20代～50代）が活躍できる場をつくる。
- 交流人口の増加と地域内の人とのつながりを深める。

見込まれる成果・効果

- 若手の地域づくりへの参画が期待できる。
- 地域内外のコミュニケーションが取れ、繋がりを深められる。
→交流人口の増加が見込まれる。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- ・話し合いの場の提供
- ・井野端会議の立ち上げに向けた周知活動

動きづくり

- ・月1回の会議の開催(支援)
- ・次回開催に向けてのアンケートの実施
- ・人員確保のためのチラシづくり

まちづくり実践活動の姿

- ・他の組織との共同開催
- ・先輩世代との協働

D 事業の概要

- 打ち合わせ会議(井野端会議)
～6月・2回, 7月・1回, 8月・1回 計4回開催
- 合同草刈り奉仕活動(井野連合自治会+井野端会議メンバー)
H28年8月7日(日)夏まつりに合わせ公民館周辺の草刈
- 事前準備(事務的支援)
消防所届出(発電機使用), 保健所届出(臨時営業許可)
- 事前準備(メンバーの自主活動)
機器リース, 抽選会景品の調達(地域内企業への協力要請)
手伝い者の声掛け
- ふるさと夏まつり
H28年8月13日(土)石見神楽の上演, 手品, 抽選会,
花火等で帰省者を楽しませた



準備の様子



まつりの様子

C 成果・課題

- ・ポスター掲示やチラシの各戸配布、またのフェイスブックによる拡散で夏まつりに合わせ、帰省する方もあった。
- ・月1回の会議に出ていない若手が会場づくりに参加。少しずつではあるが関心を持つ若手が増えた。
- ・先輩世代との交流がもう少しあるといい。助言を仰ぐ気持ちと巻き込む行動を促すようにし、次世代を担う若手を養成したい。

A 改善点

- ・活動メンバーやイベント当日の手伝いを増やすため、募集のチラシづくりと現メンバーによる呼びかけを行う。
- ・地域課題への関心度が乏しいことから、楽しいイベントばかりでなく、地域課題へ目を向けるような研修への参加を促す。

25 黒沢公民館

事業名 県公民館ふるさと教育推進事業

三隅^{まる}のごと体験「かっぱランド夏祭り」

P

事業の目的

- 黒沢の自然を活かした昔ながらの川遊びの楽しさを子供たちに伝え、ふるさとへの愛着や関心がもてるようにする。
- 夏休みを利用し、お盆前の帰省客や黒沢地区出身の方も、ふるさとの行事に参加できる場をつくることで、地域の住民との連帯感を高め、ふるさとへの思いを強める。

見込まれる成果・効果

- 地区外からも黒沢地域へ来ていただくことで、自然豊かな黒沢地域の良さを伝えることができる。
- 子どもたちにのびのびと自然にふれあう体験をさせることで子どもの豊かな心が育つ。
- 川遊びができることを実感することで、ふるさとを大切にしたり、環境保全への思いが芽生える。

入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

【きっかけづくり】

川遊びが体験できる場作り。
生涯学習推進委員会（公民館運営推進委員会）による協議会の実施。
黒沢ベース（HP）・ポスター・新聞・口コミ・ケーブルテレビ等の活用。

【動きづくり】

かっぱランド実行委員会設立。
実行委員会による協議。
地域住民に協力依頼
（自治会等を通じた広報活動）
自然環境の中で普段体験できないことへの思い出づくりの提供。

【まちづくり実践活動の姿】

高齢者のやりがいづくり。
（大自然の中で、遊び学ぶ楽しさ）
まちづくりとの基盤づくり
→地域でイベント化、収益
実行委員によるかっぱランド夏祭りの開催。

D

事業の概要

【かっぱランド夏祭り】

- 6月6日 役員会開催。
- 6月22日 実行委員会立ち上げ。（後3回開催）
- 7月30日 会場整備。
- 8月7日（日）イベント実施。
- 8月20日 反省会の開催。
- 消防署・三隅川漁協・島根県企業局・保健所・島根県河川部局等との事業説明と併行してPR活動、そして当日。その後振り返りを行った。
- 今回は参加者が約800人（内子どもが300人程度）・スタッフは74人体制そして、県大生及びリベリテ・ソシアルの学生の力を16人加えて安全面を第一義に実施した。



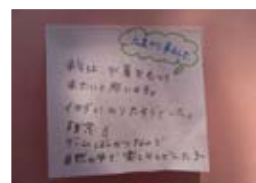
かっぱランド夏祭り実行委員会



たくさんの川遊び体験は、子ども達の笑い声が地域いっばいに響いていました



新曲
黒沢の歌「ここにある幸せ」発表



参加した人の感想がいっぱい

C

成果・課題

- ・住民が何も無い地域において、何でも出来ることに挑戦する気持ちが芽生えた。
- ・行事の説明をする中で、進んでボランティア活動に意識が向いて、参加する人が出てきた。
- ・地域外から大勢の参加者があったが、地域力とのバランスを視野に工夫を凝らす必要がある。
（様々な合わせ技を研究しながら次へステップ）
- ・地域住民が、自分達にできる役割を見つける活動へと発展させたい。

A

改善点

- ・夏休み期間とお盆の帰省客に合わせた活動ができないかを考える。
- ・もっと若い人に参加協力してもらえよう力を入れる。
- ・地域の活性化（地域力）に向けた活動を展開することから「まちづくり委員会」と十分協議協力する。
- ・公民館とまちづくり委員会とが連携を強化させ、進化させたい。

26 白砂公民館

事業名 島根県地域課題解決型公民館支援事業

「キラキラ景観」・「きらきらびと」

白砂地区景観環境保全事業



～立ち寄りたくなる しらすなを めざして～

P

【事業の目的】

白砂まちづくり委員会第2次中期計画にある「JR 沿線の景観保全」「新市道の景観保全」「有害鳥獣からの住環境保全」の3つの課題解決に向け、ゆうひパーク三隅を中心に“小さな拠点づくり”へとつなぎ、持続可能な地域を担う人づくりを目的に事業を推進する。

【目指す成果】

- ・参加意識の醸成と世代間交流および若者の参画促進
- ・持続可能な地域づくりをおこなう人づくり
- ・観光・健康づくり・学校支援等新たな人の動きの促進を図ること
- ・6次産業の創出や道の駅活性化などまちづくりとの協働につなげる



入口

住民の動きをつくる事業の性質

出口

きっかけづくり

- 白砂まちづくり委員会と情報共有周知のための会議
- 各集落自治会や関係先へ出向いて必要性の広報

動きづくり

- JR 関係者との協議・草刈り伐採段取り・反省会、産学官との連携・景観を活かした事業展開
- まちづくり委員会活性化部会を中核とした植栽作業
- 箱わな作り・狩猟紙芝居披露・猪肉試食会の開催・報告会の実施

まちづくり実践活動の姿

- 出来る人が集まって自発的に行おうと、声かけの広がり
- 「景観保全を中長期的に行うには？」という意見交換の始まり
- 積極的に箱わな設置をする姿、新規狩猟者の活動、有害物や廃棄物、見過ごしてきた物に価値を見出し地域の宝にしようとする動き出し

D

事業の概要 公民館は日程の調整、連絡、相談等

- 【JR】JR 協議連絡会 8月2日・9月15日・12月14日・2月15日
- ・地元説明会8月8日・10月23日
- ・伐採草刈り11月6日～1月22日 延：8回 延：98人 延：490時間
- ・写真撮影講習会1月28日・ふるさと恩返し清掃ボランティア2月18日
- 【黄水仙】日程調整8月5日、整地9月13日・27日、植栽10月2日
- 【有害鳥獣】
- ・箱わな作り：相談、材料発注、実施（9月11日、28日）
- ・紙芝居：打合せ6回、色塗り4回、実施（9月19日）
- ・猪肉試食会：試作会3回、保健所相談、前日準備、実施（11月6日）
- ・報告会：山崎ていじ替え歌作詞依頼、録音 報告会（1月21日）



C

【成果】

- ・白砂まちづくり委員会第2次中期計画にある地域課題なので、受け入れが容易で実施もスムーズだった
- ・「浜田地区おもてなし連絡会」発足により産学官連携へ発展の可能性ができ、白砂地区外の組織を巻き込む事ができた
- ・地区内に新規狩猟者が2名増員した
- ・若い女性が地域に出向き、活躍する姿が見られた
- ・新聞に掲載したことで自治体を超えて反響があった
- ・初のケーブルTVスタジオで歌の録音、今後の活用に幅が出た
- 【課題】
- ・日本海からの飛来ごみの清掃や草刈りを継続していく施策づくりと住民意識持続への工夫
- ・箱わな設置時、関係法令の周知不足で対応に戸惑った
- ・観光・健康・学校支援波及に向け人的支援の工夫

A

【改善点】

- ・持続するためにまちづくりや個人と情報共有を密にした
- ・団体自立へのリーダー育成の強化
- ・狩猟関係法令の一般向け学習会の開催
- ・まとまると行うときと少人数で行うときを効果的に織り交ぜる工夫

